
妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

【Nコード】

N3941Z

【作者名】

たすく

【あらすじ】

「来い」の一言が書かれた手紙を持って現れたのは、蔵馬（南野秀一）だった……！ 新世紀エヴァンゲリオンと幽遊白書のクロスオーバー作品。碇シンジの位置に蔵馬（南野秀一）。他のキャラも登場予定？

自サイトより転載。2000年ごろ書いた『妖世紀エヴァンゲリオン - Ayakashi Genesis Evangelion -』のリメイク版です。内容的には変わってないかと思われるま

すので気を付けてください。

第壹話 転生

魔界と霊界。

魔界とは、数々の妖怪が住む世界。

霊界とは、『あの世』と呼ばれる世界。

魔界は、何階層にも別れており、上層部の一部を霊界が管理している状態である。

その管理している階層において、霊界の法における犯罪を犯した妖怪を退治する『ハンター』と呼ばれる存在がいる。

その『ハンター』が今、魔界において一匹の妖狐を追いつめていた。

「俺としたことがっ!!」

銀髪の妖狐がハンターから逃げていた。

ハンターの霊的攻撃のため、体のところどころに怪我を負っていた。

「このままではまずい。確実に殺される」

ハンターは、犯罪者を捕えて法に照らし合わせて裁くというより、その場で狩る（処刑）することが多い。

妖狐は魔界を脱出し、人界に向かう。

しかし、ハンターはまだ追ってきていた。

そして致命的な一撃を受けた。

「ぐあ…　ここまでなのか…」

妖狐の意識がとぶ直前、目の前に穴が見えた。

「…！」

穴に吸い込まれ、妖狐の意識がとんだのだった。

.....

.....

.....

.....

.....

...

妖弧の意識が戻る。

「これは.....」

動けない体。

「俺は... そんな事が...」

目の前にいるのは人間の女性だった。

妖弧は人間として転生したのだった。

時に2000年…

伝説の極悪盗賊と呼ばれた妖弧蔵馬は人間として生を受けた…

第貳話 第三東京市

2015年……

あれから15年……

親戚の家に預けられていた蔵馬は、人間としての父である人物から手紙を受け取る。

『来い』

その一言と、謎の女性の写真。

（いったい今更、何のようだろう。関わりたくないんだけど…）

そう思いつつも行ってみることにした。何となくだった。

これが苛烈な戦いの始まりだったのである。

そして、蔵馬が、第三東京市につき、リニアを降りたときだった。

『本日12時30分、東海地方を中心とした、関東地方全域に特別非常事態宣言が発令されました。住民の方々は速やかに指定のシeltersに避難して下さい。繰り返しです…』

「特別非常事態宣言？ それはなんだろう。今の状況では判断できない。まあ、手紙に書いてあるところに電話して、情報を集めよう」
動揺するところか、冷静になった蔵馬は、封筒に書かれた電話番号で、電話を試みる。

『特別非常事態宣言発令のため、現在通常回線は全て不通となっ

ております。繰り返し…』

「不通か」

とりあえず、状況を判断すべきその場を動かず、周りを見回す。人っ子一人いないが、変わった様子は見られない。

そして、上を見上げると、普通では飛行してないモノを発見した。戦闘機だ。

「ん…？」

よく見ると攻撃をしているようだ。かなり遠くに煙が上がっている。

（戦争でも始まったのか？）

煙が少しずつ晴れていく。そこには巨大なモノが見え始めた。人型したモノだった。

（妖怪…？ ではなさそうだが。）

そう思っただけでいると、一台の車が走ってくる。

その車が、蔵馬の前に止まり、一人の女性が出てきた。

「南野秀一君ねっ！！ 遅れてゴメンッ！！ 乗ってっ！！」

「葛城ミサトさんでいいですね？ あれはいつたい何ですか？」

（あの写真の女性だな。）

「落ち着いているわねシンジ君。 あれはね、使徒よ」

「使徒？」

「そっ…って、NN地雷っ！ 伏せて秀一君っ！！」

ミサトは蔵馬を抱えて車の中で伏せる。同時に大爆発が起き、その爆風で吹っ飛ぶ車。

「大丈夫だった？」

「ええ。砂が口に入っただけです」

「そいつは結構。じゃ、行くわよ」

ミサトが横倒しになった車を元に戻そうとするが、女性一人では持ち上がるわけがない。蔵馬も手伝い起こした。

「ありがとう。意外にパワフルなのね。よろしく。南野秀一君」

「こちらこそ。葛城さん」

「ミサト、でいいわよん」

そのころ、ネルフ作戦本部……

「ミサイル攻撃でもきかんのか！？ 全弾直撃のはずだぞ！！」

「クソがッ！！」

目の前のモニターには、いつさいの攻撃を受け付けないモノがうつっている。使徒と呼ばれるモノ。

その使徒を何とかしようとしてる軍人たちの後ろにサングラスの男と初老の男が立っている。

軍人たちが何処からの通信を受け取り、苦々しい顔しながら、その二人にいる後ろを向いた。

「南野君。これより本作戦の指揮権は君に移った。お手並みを見せてもらおう」

「了解です」

サングラスの男が言う。

「南野君。我々の所有兵器では目標に対し有効な手段が無いことを認めよう」

「だが、君なら勝てるのかね？」

口々に言う軍人たち。不快感は顔に浮かんでいる。

「そのためのネルフです」

南野は確信を持って言った。

「期待しているよ」

軍人たちはテーブルごと本部から退場した。

「国連軍もお手上げか。どうするつもりだ？」

南野の横に立っていた初老の男が口を開いた。

「初号機を起動させる」

「初号機をか？ パイロットがいないぞ」

「問題ない。すぐに秀一が来る」

（しかし、何故だ… 私が入手した死海文書の予言より、一年遅い… 何か不確定要素でも入ったのか…）

第参話 特務機関ネルフ

「特務機関ネルフ？」

「そ。国連直属の非公開組織」

「父がいるところですね？ 俺に何をさせるつもりですか？」

「それは、お父さんに会って聞いた方がいいわね」

「そうですか」

（国連直属… 情報統制は相当のモノのようだ。）

（取っつき難い子ねー。でも、なんで長髪なのかしら？ 似合っているから良いけど。）

しばらく二人で無言で道を進む。が、ミサトは道に迷ってしまったようだ。

「ここ、さっき通りませんでしたか？」

「ごめえん。まだ道になれてなくて」

「……………そうですか」

冷めた目で見られたのは、ミサトの見間違いではなさそうな気がした。

（なんて、冷静…）

「さっき通りましたね。ここも」

「…」

ミサトは何も言えなかった。

それからしばらくウロウロという表現が正しいと思うぐらい、道を進む。二人はもちろん無言だ。

（組織員としては、迷子とは失格だな。）

蔵馬のミサトへの第一印象はよくない。そこへ後ろから二人に声かけられる。

「どこへ行くの？ 葛城一尉。」

ミサトと蔵馬が同時に振り向く。白衣を着た金髪の女性が立っていた。

少し冷たい感じのする美女だった。

「遅かったわね。」

「ごみいん！」

ミサトが顔の前で手を合わせ、謝る。

「例の男の子ね。」

「そう、マルドウック機関から選ばれたサードチルドレン。」

「わたしはネルフ技術一課E計画担当博士赤木リツコ。よろしく。」

「南野秀一です。よろしく。」

『総員第一種戦闘配置。繰り返す、総員第一種戦闘配置。対地戦用意。繰り返す…』

突然、館内スピーカーから放送が流れる。

「ですって」

「これは一大事ね」

「それで、初号機はどうなの？」

「機動確率は0.00000000001%。09システムとはよく言っただものだわ。」

「それって動かないって事？」

「あら失礼ね。0ではなくってよ」

「数字の上ではね。でも、どのみち動きませんでした。じゃもう

すまされないわ」

二人の会話に我かんせずの蔵馬だったが、ふと蔵馬は一つ思った。

（たぶん父さんが呼んだのは、このためだな。）

蔵馬はミサトとリツコにある部屋に入る。ミサトが入り口を閉めると真っ暗になった。

「真っ暗ですよ」

リツコがスイッチを押す。

ライトがつき、蔵馬の眼前に巨大な鬼のような顔がある。

（靈気も妖気も感じない。いわゆる巨大ロボットというモノなのか。）

「ロボットと思ったと思うけど厳密に言うとロボットではないわ。人の造り出した汎用人型決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン。その初号機」

（人造人間……？）

「これが父の仕事ですか？」

「そうだ」

エヴァの頭上から声がかけられた。管制室と思われる部屋のガラス越しに自分の父親、南野ゲンドウを見つけた。

「久しぶりだな」

「……………」

「…出撃」

ゲンドウがつぶやく。

「出撃！？ 零号機は凍結中でしょ！？ まさか、初号機を使うつもりなの！？」

「他に方法はないわ」

「だってレイは動かせないでしょ？」

ミサトは蔵馬をチラツと見る。

「パイロットがいないわよ」

「さつき届いたわ」

「…マジなの？」

リツコはミサトから蔵馬に視線を移す。

「南野秀一君。あなたが乗るのよ」

「お断りします」

「即断なのね…」

「俺はよくわからない状況では流されないんですよ」

「座っていればいいわ。それ以上は望みません」

「お断りします」

「秀一君…！」

「正規のパイロット？がいるでしょう？　その方が乗れば良いんじゃないんですか？」

何も言えなくなってしまうリツコ。そこへゲンドウから一言。

「…そうか。冬月、レイを起こせ」

第肆話 出撃

しばらくして、廊下から包帯で巻かれた少女が運ばれてくる。ミサトが何か言っていると苦痛の表情で起き上がろうとするが、痛みか、すぐ倒れこんでしまう。

(…………… 正規のパイロット？が、この状態で乗せようとするのか。)

それを観察している蔵馬。少女は何度も起き上がろうとするが、すぐ倒れてしまう。包帯からは血が滲み始めていた。

(…………… 怪我の治療は適当、いや出鱈目だな。)

(…………… 父さん、いやあの男は何を考えている。俺を乗せるための作戦か？)

(…………… さっさと帰りたいところなんだけど見捨てることはできないな、よし。)

「彼女をのせるのですか？ ミサトさん？」

少し冷たい声をミサトに向けた。

「そうよ」

「では、俺が乗れば彼女をちゃんと治療してくれるのですか？」

「え？」

「傷口が開いているようですよ。出血が酷い」

ちらりと少女を見る蔵馬。

「……！ わかったわ」

「了解。……父さん」

少女から、ゲンドウの方へ目を移す。

「なんだ？」

「後で理由を聞くことにしよう」

「……………」

「………… えっと、それではどうすればいいんでしょうか？」

蔵馬は、声のトーンを少し上げミサトに聞いた。答えたのはリツコだ。

「私が教えるわ。ついてきて頂戴」

「わかりました」

「停止信号プラグ。排出終了」

「了解。エントリープラグ挿入」

「第一次接続開始」

「エントリープラグ、注水」

エントリープラグ内を黄色い液体が満たされていく。

蔵馬は着の身着のままの制服姿だ。黄色い液体で濡れていくのは多少気持ち悪い。

「何ですか？ この怪しい水のようなモノは」

ゆつくりと黄色い液体が上がってくる。感触はあまりよろしくない。

「ＬＣＬと呼ばれるモノよ。大丈夫。肺がＬＣＬで満たされれば直接血液に酸素を取り込んでくれるわ。すぐに慣れるから」

「慣れたくないですね」

「…… そう」

（結構毒舌家なのね。きれいな美少女顔しているのにね。女装すればモテモテなんじゃないのかな。）

場違いの事を思うミサトだったが、すぐ気持ちを入れ替えた。

（その辺の事は生き残ってからにしましょうか。）

ＬＣＬに満たされながら、蔵馬は違和感を感じた。

（妖気でも霊気でもない… 何かいる…）

「A10 神経接続開始」

（神経接続？ 思った通りに動かすことができるのか？）

「思考形態は日本語を基礎原則としてフィックス」

「初期コンタクト問題なし」

「シンクロ率……… え？」

オペレーターの一人が目を疑う。

「どうしたの？」

「あ、すいません。シンクロ率、78・27%」

「なんですって!？」

その報告を聞いて、リツコが驚愕する。初めて乗った人間が出せる数値ではなかったのだ。

「計測器は？」

「全て正常です」

オペレーターが機器のチェックを行うが、異常はなかった。何度も確認するも異常はなかった。

「…………… すごいわね」

驚きの声を上げるミサト。

「ハーマニクス、全て正常位置。暴走、ありません」

「いけるわ、発進準備!!」

ミサトの号令が響く。

そして発進準備が一通り終わると、ミサトはゲンドウの方を向いて聞く。

「かまいませんね」

「もちろんだ。使徒を倒さぬ限り我々に未来はない」

それを聞いて無言でうなづくミサト。

「発進!!」

すさまじいスピードで打ち上げられる初号機。そして地上に射出される。

しかし、場所をわかっていたかのように、使徒が現れた。

（そういえば、作戦聞いていなかったな……）

第五話 自爆

エントリープラグ内の蔵馬。

「敵の前に出されても困るのですが」

『う』

「確か作戦もないですよな？」

『う』

「次回があるかどうか知りませんが、その時はちゃんとしてください」

『……はい』

『何やってるのかしら？ ミサト？』

通信にリツコが割り込んでくる。

「リツコさん？ とりあえずどうすればいいのでしょうか？」

『秀一君。まずは歩くことだけを考えて』

「了解」

蔵馬は歩く事を考えるとエヴァは使徒向かって歩き始める。

（なるほど）

目の前に待ち構えた使徒がビームをエヴァに向かって発射。間一髪かわすと、後ろのある射出口のある建物が蒸発した。

（危ない危ない。しかしアレはなんだ？ 妖怪の類ではないようだが。）

ビーム発射後、ジャンプしていたであろう使徒が空から降ってくる。そして、頭を鷲掴みにされた。

そのまま、地面に叩き付けられる。

「ぐっ！？」

（叩き付けられたのはこのエヴァとかいうロボットの頭だ。なのに何故俺までダメージが来る！？）

(……そうか、ダメージもフィードバックされるといのか。)
使徒の胸部を攻撃し、なんとか拘束から逃れる。
今の一撃でエヴァ頭部が損傷したらしい。赤い液体が流れ出ていた。

『生命維持に問題発生！ パイロットが危険です！』

ミサトはこれ以上の戦闘はムリと判断した。

『作戦中止！ パイロット保護を最優先！ プラグを強制射出して！』

「待つてください」

しかし、オペレータたちの了解の言葉より先に蔵馬の声が発令所に響いた。

『秀一君！？』

「この操縦のコツがだいぶ判ってきました。大丈夫です」

助走して使徒へ殴りかかる。しかし、壁のようなモノで弾き返される。

弾き返された瞬間、八角形の波紋のようなものが流れた。

(なんだ今のは？)

くるりと一回転して、着地した。

『A・T・フィールドと呼ばれるものよ。詳細は残念ながらわかってないわ』

リツコから通信が入る。

「えーていーふいーるど？」

『現時点でわかっているのことは、壊さない限り使徒には近づけない、それだけよ』

「使徒が自爆しました!!」

「初号機はっ!!」

「初号機を確認!! パイロット生存!!」

「ほっ…… よかった。回収班および救急隊の出動を要請して」

「はいっ!!」

「南野、勝ったな」

「ああ」

目の前のモニタには、後始末が行われていた。もちろん、この
事実は隠蔽される。

突如、司令室の暗くなり、番号の書かれた謎の板が姿を現す。

「使徒再来か。あまりに唐突だな」

「15年前と同じだよ。災いは突然訪れるものだ」

「幸いとも言える…… 我々の先行投資が無駄にならなかった点
においてはな」

「そいつはまだわからんよ。役に立たなければ無駄と同じだ」

「左様。もはや周知の事実になってしまった使徒の処置」

「情報操作、ネルフの運用は全て迅速かつ適切に行ってもらわ
ないと困るよ」

「その件に関しては既に対処済みです。ご安心を」

「しかし南野君。ネルフとエヴァもう少しうまく使えんのかね」

「左様。零号機に引き続き、君らが初陣で壊した初号機の修理代。国が一つ傾くよ」

沈黙の幻童。

「聞けばあのオモチャは君の息子に与えたそうではないか」

「人、時間、そして金。親子そろって幾ら使えば気が済むのかね」

「それに君の任務はそれだけではあるまい。人類補完計画。これこそが君の急務だ」

「左様。これこそがこの絶望的状况下における唯一の希望なのだよ。我々のね」

「いずれにせよ。使徒再来による計画の遅延は認められん。予算については一考しよう」

「では、後は委員会の仕事だ」

「南野君。ご苦労だったな」

「南野…… 後戻りはできんぞ」

第陸話 ゲンドウ

エヴァの暴走もあり、精密検査を行うため、蔵馬はネルフ直属の病院に来ていた。

検査結果が出るまで、廊下のソファで待つことになる。

（とりあえず、父さんから話を聞こう。判断はそれからだ。）

しばらくして、名前を呼ばれて結果を聞く。問題はなかった。

ありがとうございます、と診察室を退室した蔵馬はそのままエレベーターへ向かう。

そこにはゲンドウが立っていた。

「父さん」

「ついて来い」

そう言つとエレベータに乗る。その後へ蔵馬も乗る。

「戦闘前に言った話をしたいんですが」

「今から司令室へ向かう。ここでは無理だ」

「わかった」

司令室につくとそこにはすでに冬月がいた。

「秀一君、大丈夫かね？」

「検査結果は問題ないようです」

「それはよかった」

ゲンドウが席につき、蔵馬は指令席の前に立った。

「話してくれますか？」

「アレは使徒と呼ばれる人類の敵だ。詳細はわかってない」

「敵と判断した理由はなんですか？」

「攻めてきた以上、対抗せざるを得ない」

「目的も不明ですか」

「ああ」

蔵馬はため息をついた。呆れたからだ。

「まあ、今はいいでしょう。何かわかったら話してくれますか？」

「…………… 良いだろう」

（隠し事満載ですか）

ゲンドウが詳細は知っているようだが話そうとしない。薄々と感づいていたが顔に出さない蔵馬。

「帰るのか？ 帰るのではあれば多少監視を付けざる得ないが」

（非公開組織だから、仕方がない。いざとなればいくらでも誤魔化せる。しかしながら、俺自身も興味がわいたのは確かだ。条件付きで乗ろう。）

「…………… 条件付きでよければ乗りますよ」

「その条件とは？」

「まずは住居。監視付で構わないのでマンションあたりをお願いします」

「問題ない。すぐ用意する」

「そして使徒。何かわかったら話してください」

「機密以外は伝えよう」

「機密が多すぎるような気がしますけど」

「……………」

「後は、俺が何をしようとも不干涉でお願いします」

「不干涉だと」

「さすがに一日中干涉されるのは嫌ですからね」

「わかった、問題ない。冬月」

「すぐに準備するでしょう。それでいいな、南野」

蔵馬には冬月に丸投げしたように見えた。

「父さん、丸投げはよくないですよ」

「……………」

半日もたたず、住居であるマンションの一室のカギが渡される。場所は、ミサトの住むマンションと同じ階であり、隣同士ではない。

（親睦を深めるという意味もあるし、監視という意味もある。離れているのは俺が年頃の男だという事か。興味もないが。）

第三東京市立第三東京高校への転入が決まる。ここは、もちろんネルフ支配下にある学校だ。

美形の転入生徒とあって、女生徒は黄色い声を上げ、男子生徒は嫉妬の声をぼそと上げた。

（高校生活が楽しめると思えないが、まあいいか。）

しかしながら、蔵馬はそう思うだけだった。

使徒が来ない間は、一学生として高校へ通う蔵馬。そして、授業が終わるとその足へネルフへ向かう。

名目上は戦闘訓練だろう。ゲンドウからすれば息子の調査であり、蔵馬からすればネルフの調査である。

どちらも詳しいことがわからないまま。

（……俺と志保利の子であることは間違いない。しかし……）
（組織が組織だけあって、監視カメラが多いな。しかも俺を探っている気配もある。父さんか、ここが気に入らない連中だな。）

その日の訓練でエントリープラグ内にいた。シュミレーション用だが、本物と変わりがない。

『おはよう。秀一君。調子はどう？』

リツコより通信が入る。

「悪くはないです」

『それは結構。エヴァの出現位置、非常用電源、兵装ビルの配置、回収スポット。全部頭に入ってるわね？』

「はい。」

『では、おさらいするわね。前にも言ったけど、通常、エヴァは有線からの電力供給で稼働しています。でも非常時に体内電池に切り替えると、蓄積容量の関係でフルで1分。ゲインを利用してもしせいぜい5分しか稼働できないの』

（……ウルトラマンですか、このエヴァという兵器は。）

『では、インダクションモードの練習、始めるわよ』

通信が切れるとビル群からこの前初号機が殲滅した使徒が姿を現す。蔵馬は無言のまま、パレットガンから銃弾が照射される。

そして、見事に命中。倒れる使徒。

『その調子よ。次。』

（こんな武器が通じるとはとてもじゃないが思えないな……）
ほぼ100%の命中率を見せる蔵馬。

ガラス越しからリツコ、オペレータの一人伊吹マヤ、その後方でミサトがその様子を見ている。

「しかし・・・よくまた乗ってくれる気になってくれましたね。彼」

マヤがリツコに言う。

「あの子は強いわ。あの程度でくじけたりしないみたいね」

（でも、何かがおかしい。射撃の腕はゲーセンでと言っていたけど、調査ではそんなのなかったし…）

ミサトは無言で初号機を見ているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3941z/>

妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

2011年12月16日21時52分発行